

研究タイトル:

## スポーツ動作の運動感覚に関する研究



氏名: 近藤 雅哉 / KONDO Masaya E-mail: kondo@toyota-ct.ac.jp

職名: 講師 学位: 修士(教育学)

所属学会・協会: 日本体育・スポーツ・健康学会、日本スポーツ運動学会

キーワード: 運動観察、動感画、運動感覚、トレーニング方法

技術相談  
提供可能技術: 運動技術の指導  
跳動作の基本技術や動き作り

### 研究内容: スポーツ運動観察力の視点から「できない」を「できる」に変える指導法

#### <人が行う運動・動きの捉え方>

動作を指導・技術学習をする場において「できる」を体感させるためには、指導者の運動観察力が問題になる。人の運動・動きを「その人はどのようにやっているのか」という動きの感じ(動感)をいかに読み取るかが重要なポイントとなる。例えば①「膝が曲がっている」、②「膝を曲げている」、③「膝が曲がってしまう」について、3者とも客観的には「膝が曲がっている」という同じ現象であるが、運動をしている側の運動体験世界に立てば、これら3者は全く異なった内容となる。①の「膝が曲がっている」は、運動者の感覚世界のことは関係なく、まさに客観的事実のみを拾った観察である。この観察態度では、どうやって行っているのかの問題は排除されており、外部視点による運動観察なのである。指導の際、他者の動感を捉えるための第一段階として、この外部視点から技能査定を行うことは重要であるが、これに対して、②と③は「どのようにやっているのか」という運動感覚世界をみている観察態度である。ここではさらに、意図的に曲げようとしているのか、伸ばそうとしているが少し曲がってしまうのか、あるいは偶然にその時だけ曲がってしまったのかを見分けようとする問題意識をもった観察態度となっている。技のコツやカンといった運動感覚を運動者がどのように感じながら、行おうとしているのかを理解しようとするれば、後者②③の観察のしかたである他者の動感世界に潜り込み自分の感覚としてイメージする(潜勢自己運動)による運動観察が必要である。このような視点をもとに研究している。

#### <スポーツ動作において「できない」を「できる」に変える>

子どもは「できる」ことに喜びを感じ、「できる」と自信を持つようになる。しかし、最近は運動の苦手な子が増えており、従来よりもきめ細やかな指導が求められている。運動が苦手として“運動神経が悪い”という表現が使われることがあるが、それは生まれつきではなく、生育環境によるところが大部分だと考えられる。つまり、生まれてからの運動環境が恵まれていると“運動音痴”にはならないが、どんな子どもに対しても、できないことをできるようにすることが指導者に求められる。「できない」にもいろいろな「できなさ」の学習段階があり、ただ単に「できない」というのではなく、「どんなことができるのか」、「どのようにどの程度できるのか」と捉え、学習段階の課題に応じて、無理なく技や動きの習得を促す指導プロセスを研究する。そこでの学習段階を判断し「何ができるか」を読み解くのは、指導者の観察眼である。個人に応じた学習課題を見抜く力、個人に応じた学習の道筋をつける力、コツやカンの運動感覚を学習者と交信する力などが指導者には要求される。このような動感指導に関わる諸問題について研究している。

#### 提供可能な設備・機器:

##### 名称・型番(メーカー)

| 名称・型番(メーカー) |  |
|-------------|--|
|             |  |
|             |  |
|             |  |
|             |  |